
仮面ライダーディケイド オールライダーVS大ショッカー

水城柳羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーディケイド オールライダーVS大ショッカリ

【Nコード】

N4404P

【作者名】

水城柳羅

【あらすじ】

世界は崩壊の道筋へと進んでいた……。士達は新しい世界へとどり着く。しかしそこは士にとって見たことのある世界。「ここは士くんの世界?!」自分の世界へと降り立ち、数々の記憶が自分の脳裏をかすめる。世界の崩壊から救うため、全ライダーと戦い最強のライダーを決めるバトルへと発展し……?

夏の陣「仮面ライダーディケイド オールライダーVS大ショッカリ

「」の要素を取り入れつつ、漫画版オーライダーVS大ショッカ
ーを軸に話を進めていくつもりでいる。勿論オリジナルの設定も加
えていくつもりだが、ほとんどの設定は変えずに行こうと思ってい
る。

プロローグ 光夏海の夢

少女は夢を見ていた。

少女の名前は光夏海。

その夢は悪夢。世界が崩壊する・・・その直前の夢。

その夢はオールライダーが一人のライダーと闘っている・・・そんな夢。

しかしいつの間にかライダー達の人数が減って行く。

ひとり、またひとり・・・。ひとりのライダーによって倒されていく。

夏海「・・・これは一体・・・。何が起きているんですか・・・？」

爆発の音とともに数が減っていく。

その爆発に巻き込まれながらもなんとか逃げ切っている夏海・・・。

そんな中、一人のライダーと出くわす。

クウガ「夏海ちゃん！どうしてこんなところに？！早く逃げて！」

夏海「ユウスケ・・・？これはいったい何が・・・。」

クウガ「いいから！！！」

そんなとき。

夏海の近くで大きな爆発がおきた。

夏海「きゃっ！！！」

とっさからだをすくめる。

すると先ほどのライダーともう一人のライダーだけが立っていた。

その姿を見て愕然とする夏海。

夏海「・・・ユウスケ・・・？・・・士くん・・・？」

クウガ「俺は倒す・・・！お前を・・・！」

ディケイド「やってみろ。」

クウガは真つ黒のオーラを放ちながら突進していく。
その姿はまるで闇。

夏海「ダメ・・・！これ以上二人が戦ったら・・・！」

アルティメットクウガ「ウオオオオオオオオ！！！！！」

夏海「世界が・・・世界が滅びてしまう・・・！」

そんな夏海の声も届かないまま、腕に力を込める二人。
そしてそのまま・・・

夏海「ユウスケ・・・！士くん・・・！！！！！」

大爆発

To be continue...

ブログ 光夏海の夢（後書き）

ディケイドの小説を書くにあたって、

この夏の陣を書くのが一番難しいと思っています。

なので全てオリジナル、ではなく、本編や漫画版のいいところを取り入れながら書いていこうと思っています。

個人的には漫画版の進め方が気に入っているため、漫画版を軸に書いていくつもりでいます。

目標は全十五話＋エピソード＋総括。

頑張りますので、応援よろしく願います。

水城柳羅

第一話 士の世界（前書き）

ついに始まりました！

仮面ライダーディケイド夏の陣！

自分の中で彼らをどう動かすか、構想中ですが
なんとなく終わりは綺麗になるだろうと！

あ、あと、映画版ほぼ無視で進みます！（↑）

それではどうぞ。

第一話 土の世界

いつものようにタペストリが落ちてくる。

彼らはこのタペストリが落ちてくることによって、世界を移動していた。

そしてまた今日。

新しいタペストリが落ちてきたのである。

夏海「・・・これは一体何の世界なんでしょう。」

ユウスケ「・・・さあ。なんか家の写真みたいだ。」

栄次郎「・・・あれ？この風景どこかで・・・。」

光栄次郎。

記憶がない土を拾ってくれた。謎の人物。

彼は何かを探しに玄関の方へと足を進めた。

栄次郎「・・・あつたあつた。これこれ。この写真と似ているね。」

夏海「そういえば・・・。」

土「・・・似ているな。」

ユウスケ「でもなんでこれがここに？」

土「さあな。」

夏海「ちよつと！土くん！どこに行くんですか！」

土「この家を探してみればいいだろ。何かわかるかもしれないからな。」

ユウスケ「お、おい！」

土はこの世界のことをなんとなくつかんでいた。
風景に見覚えがある。あの家の道筋も。そして服のポケットに鍵が

入っていたことから。

士たちはバイクに乗り（夏海は土の後ろに乗っている）、写真の家を探し始めた。

士の行動に疑問を抱きながらも後ろから付いてくるユウスケ。

士の勘は・・・こういうときこそ当たる。

夏海「探すって・・・わかるんですか？」

士「俺の勘が当たっていれば、な。」

ユウスケ「・・・大丈夫かよ。」

士が運転していたバイクが急停止する。

いきなり止まったので、後ろに乗っていた夏海、後ろから追いかけていたユウスケが驚く。

そしてユウスケは土に叫んだ。

ユウスケ「お、おい！急にとまるな！危ないだろ！」

夏海「・・・心臓が止まるかと思いました・・・。」

士「・・・あれだ。」

ユウスケ・夏海「「ええ?!」」

目の前にはタペストリ・写真と全く同じ家が建っていた・・・。
その光景を見て驚くユウスケ。士はやっぱりな、という表情をしている。

ユウスケ「・・・なんでわかったんだよ。」

士「・・・見覚えがあるんだ。この風景。」

夏海「・・・それじゃあ・・・ここは土くんの世界・・・?!」

士「・・・俺の・・・世界・・・？」

ここは「士の世界」・・・。

3人は扉の前に立っていた。

士はポケットの中から鍵を取りだす。

その行動にも驚くユウスケ。

ユウスケ「ええ?!それ、何処から出てきたんだよ！」

士「入ってたんだよ。この世界に来た時から。」

夏海「じゃあこれがこの家の鍵、ということですか？」

ユウスケ「じゃあここって・・・もしかして。」

夏海「士くんの家・・・？」

士「とりあえず入るぞ。」

ユウスケ「いいのかよ。不法侵入だぞ。」

士「俺がここに住んでいたのなら別に不法侵入じゃないだろうが。」

夏海「口げんかしていないで、行きますよ!」

夏海になだめられながら、家の中へと入って行く士たち。

士は思った。やはりここを知っている、と。

士「(この先に階段があつて。それを上ると・・・何があるんだ・
・・・?)」

ユウスケ「・・・ピアノの音？」

夏海「これはドビュッシーの月の光・・・。」

士「詳しいんだな、ナツミカンのくせに。」

夏海「ちよっと・・・それ、どういう意味ですか？」

笑いのツボを今にもしそうな姿になったため、それ以上何もいわなくなつた士。

しかし目の前に白い階段が現れた途端、彼の中で勘が確信に変わる。

士「（俺はなぜここを知っているんだ・・・？）」

階段を上ると白いピアノを弾いている少女がいた。

ユウスケが少し音を立ててしまう。

少女「・・・誰？！」

ユウスケ「・・・あ！」

士「・・・バカ野郎。」（ユウスケをどつく）

ユウスケ「いてっ！」

少女は士の方をじつと見つめている。

その視線に気づいたのか、士も少女の方に視線を向ける。
するといきなり少女が士に駆け寄ってくる。

少女「お兄ちゃん！！！」

士「・・・？！」

少女「帰ってきてくれたのね？小夜、嬉しい！」

士「・・・俺が、か？」

少女「・・・どうしたの？お兄ちゃん。」

いきなりのこの行動に戸惑ってしまう士。

少女は反応が返ってこない士を心配そうな視線を向ける。

男「何かありましたか、小夜さま。」

少女「月影さん！お兄ちゃんが帰ってきたの！」

男「・・・？！士さん？」

士「……俺は……。」

夏海はこのままではちが明かないと思ったのか、二人に士は記憶がないことを話す。

その事実を聞かされショックを受ける小夜を支える月影と呼ばれた謎の男……。

月影「そうですか。士さんは記憶を……。」

夏海「はい……。」

月影「1年前、士さんは旅に出られました……。残された妹の小夜さまはずっとお帰りをお待ちしていたのですが……。」

ユウスケ「まあでもさ、ここが士の世界なのは間違いないみたいだし。」

夏海「そうですよ。ここが土くんの旅のゴールなら、世界は救われたってことじゃないですか？」

月影「いえ……まだです!!!世界は破滅へと向かっています。」

士たちは驚く。

士「どういうことだ……?」

月影「それぞれの世界にそれぞれの仮面ライダーが生まれました。

各世界のライダーの力がたがいに引き寄せあい、全ての世界を一つにしようとしています……。」

士「……どこかで聞いたような話だな……。!で、どうすれば世界は救われる?」

月影がにやりと笑いこうつぶやいた。

月影「最強のライダーを決めるんです。それもたった一人……。士「……最強のライダー……?」」

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
:

第一話 土の世界（後書き）

遅くなってしまう、ごめんなさい。

こんな感じで進んでいきます！

全てを破壊し、全てを繋げ！

第二話 ライダーバトル（前書き）

映画版にしても漫画版にしても

可哀想な位置にいるユウスケ・・・。

この小説でもやはり可哀想な位置になるユウスケ・・・。

・・・ユウスケファンの方すみません（↑）

第二話 ライダーバトル

月影「最強のライダーを決めるんです。それもたった一人……。」
士「……最強のライダー……だと？」

月影「ええ。そうすれば世界は救われます……。」

士は疑問に思った。

そんな簡単に事が進むものなのか、と。

しかし夏海やユウスケはあまり疑っていないようだった。

ユウスケ「じゃあその最強のライダーが決まれば……。」

夏海「世界は救われる、ということですね？」

月影「ええ。そうです。」

士「……待てよ。そんな簡単にいくものなのか？」

月影「……いきますよ。あなたの作った世界をつなぐ橋を使ってね。」

士「……俺が作った世界をつなぐ橋……？」

——なんなんだそれは。聞いたことがない。

そう思った士だったが、頭の中に映像が流れ込んでくる。
大ショッカーのこと……昔の自分……そして……。

士「（これは……。そうか……。そういうことか……。）」

士はニヤツと笑った。

それに気づいたのは小夜と月影だけ……。

小夜「・・・お兄ちゃん？」

士「そうか・・・すべてわかった!!」

夏海「・・・え？」

ユウスケ「じゃあ記憶が・・・？」

士「月影・・・全てのライダーを集める!! 誰が最強か勝負してやる! この世界は・・・俺が救う!!」

最強のライダーを決めるバトルに参加することになった士とユウスケ。

夏海は客席で見守ることに。

ナレーション「最強のライダーを決めるライダーバトル!! 最初の対戦は・・・?!」

『ディケイドVSアマゾン!!』

士「さつそく俺の試合だな。」

ユウスケ「頑張れよ!!」

士「・・・ああ。」

客席の後ろ方で見つめている月影。それに目配せする士・・・。
そのままバトルフィールドへと消えていった・・・。

士はバックルを取り出し腰に巻く。

目の前の相手をニヤリと笑いながら考え込む。

相手がアマゾンなら、何に変身するといいかと。

士「変身！」

「KAMEN RIDE DECADE」

「KAMEN RIDE HIBIKI！」

響鬼「DCD」さて、いくぜ！」

アマゾン「アーマーゾン！！！！！」

「ATTACK RIDE ONGEKI - BOU REKKA！」

響鬼「DCD」たあ！！！」

アマゾンはその攻撃をよけ、士の腕をかみつく。

響鬼「DCD」いって！おい！反則だろ！」

「ATTACK RIDE ONIBI！！！」

鬼火によってアマゾンはディケイドから離れる。

攻撃の態勢に入ろうとしたとき、士はもう必殺技の準備をしていた。

響鬼「一気に決めるか！」

「FINAL ATTACK RIDE HIBIKI！！！」

響鬼「はあああ！！！！！」

爆発

ナレーション「ディケイド勝利ー！！！」

ユウスケと夏海は客席でガッツポーズを決める。
士が客席の方に戻ってくると、ユウスケがオ・・ミンコを渡す。

ユウスケ「やったな！」

士「・・・俺たちはいつかは戦う定めだぞ？」

ユウスケ「その時は俺が倒す！」

士「ふん・・・勝手に言ってる。」

夏海はそんな二人の様子を微笑みながら眺めていた。
しかし月影は無表情で二人を見つめていたのだった・・・。

ユウスケも順調に勝ち進み、とうとう最終決戦となる。

ナレーション「各地で激しいライダーバトルが繰り広げられてきましたが・・・いよいよ最後の頂上決戦だ！」

士「で、どのライダーが勝ち残ったんだ？」

ユウスケ「・・・やっぱり士も勝ち残ったんだな。」

士「お前もな。」

海東「おいおい、僕を忘れてもらったら困るな。」

ユウスケ「海東？！お前はいなかったはずじゃ・・・？！」

海東「ギギの腕輪しか奪えなかったよ。」

士「・・・どんな手を使ったか知らないが・・・。」

海東が現れ騒然となるが、士は特に気にしていないようだ。
それより彼は相手が気になるのだ。

ナレーション「勝ち残った6人のライダーによるタッグバトル！勝ち残ったライダーは・・・！」

ナレーション「仮面ライダーBLACK！仮面ライダーV3！仮面ライダースーパー1！そして、仮面ライダーディケイド！仮面ライダークウガ！仮面ライダーディエンドだ！！」

士は残ったライダーを見て少し疑問を抱くが、そこは気にしないことにした。

倒せばいいのだ・・・。

士・ユウスケ・海東「「「変身！！！！」」」

「KAMEN RIDE」 「KAMEN RIDE」

「DECADE！！」 「DEEND！！」

DCD「よし、行くぞ。」

クウガ「よっしゃー！」

DED「・・・。」

ディケイド&クウガ&ディエンド VS ブラック&V3&スーパー1の闘いは始まったばかり・・・。

そんな中、月影だけは笑っていた・・・ただ。

夏海はそんな月影の様子に気づかないでいた・・・。

彼の目的とは一体・・・？

To be continue...

第二話 ライダーバトル（後書き）

会話ばかりでごめんなさい・・・！

次回はなるべく心象描写も増やします・・・。

・・・あれ、映画版の相手ってこれでしたっけ。

スーパー・・・だっけ。なんか思い出せない（↑）

漫画版と同じ、ってことでお願いします（笑）

世界を破壊し、世界を繋げ！

第三話 月影の真の姿・・・（前書き）

ユウスケクウキ…orz

そして海東は本当にしょーもない↑

月影はやっぱり意味が分かりませんね↑

えっと…シャドームーンは仮面ライダーだそうですね…

知らなかった…↑

じゃあ、シヨツカーライダーも仮面ライダーなんですかね…？

それでは第三話お楽しみください。

第三話 月影の真の姿・・・

最終決戦は3対3のタッグバトル。

海東はどうやって勝ち上がったのかは謎だが、士は特に気にしないことにした。

DED「さて、どう戦おうか。」

DCD「どうせお前は何かのお宝目当てじゃないのか？」

DED「…失礼しちゃうな。士を助けにきてあげたのに。」

DCD「勝手に言ってる。付き合いきれん。」

DCD「ATTACK RIDE SLASH!!」

DED「ATTACK RIDE BLAST!!」

一方、ユウスケは追い込まれていた。

クウガ「くっそ…強い…！士たちは何やってんだよ…」

BLACK「はっ!!」

クウガ「わわわっ!!」

DCD「ATTACK RIDE BLAST!!」

BLACK「んがっ!!」

DCD「まったく、何やってんだ…」

クウガ「士こそ…!!」

士はもう一度相手の様子を見た。

海東も近くに寄ってくる。

DED「…さて。後は頼んだよ」
DCD「…は?!」

DED「ATTACK RIDE INVISIBLE!!」

海東はインビジブルのカードで戦線離脱した。

クウガ「ちょ…!それ、逃げ…!!」

ユウスケが海東が消えた方向を見ると、相手側はアイコンタクトをし、攻撃をしかけた。

クウガ「…うわあああ!!!!!!」

DCD「ユウスケ!!」

ユウスケも戦線離脱となり、士は一人で三人と戦うハメになった。

DCD「ちっ!」

ナレーション「おっとー?!ディケイドピンチ!一人でどうやって三人と戦うつもりなのかあ?!」

BLACK「一気に決めるぞ!」

V3「V3逆ダブルタイフーン!」

DCD「くそっ!」

「ATTACK RIDE ILLUSION!!」

士はイリュージョンのカードで分身を作った。

「FINAL ATTACK RIDE DECADE!!」

DCD「ハアアア!!」

《大爆発》

ナレーション「どちらが勝ったのか?!…おっとー?!立っているのはディケイド!ディケイドの勝利だあ!!」

士は変身を解除した。

そこにユウスケと夏海が駆け寄ってくる。

ユウスケ「やったな!士!」

士「…ああ。」

ユウスケ「それにしても強かったな。また出会ったら、手合わせしたいぜ。」

士「…ライダーは消滅した…。もう会えることはない…。」

ユウスケ「どうしたことだよ?」

夏海が士に尋ねようとしたとき、後方から突然拍手が聞こえてくる。

…月影だ。

月影「…さすがディケイド（破壊者）ですね…。」

ユウスケ「月影さん…?」

士「…どうなんだ、月影。これで世界は救われたのか?」

月影はニヤリと笑いながら、士の言葉を否定する。

月影「いいえ。まだです。」

士「……どういうことだ？」

月影「まだ倒すべきライダーがいるではありませんか。」

月影はユウスケを指差しながらこう言った。

ユウスケは驚きながら士と月影を見ている。

士「……まで、こいつは……。」

月影「……それからあなたも。」

士「……?!」

《ドオオオン!!》

大きな爆発が起こった。

咄嗟に顔を覆う士と夏海……。

おさまってから顔をあげると、灰色の仮面を被った人物が気絶しているユウスケを拘束していた。

夏海「ゆ、ユウスケ!!」

士「……月影……。騙していたのか。」

月影「ライダーは私だけでいい……。このシャドームーンだけでな!」

シャドームーンは士を思い切り蹴飛ばした。

士「……ぐあっ!」

夏海「士くん!!」

壁に直撃し、一瞬息が出来なくなる。

士「ごほっ！…くっ…！！」

シャドームーン「…お前はよく働いた。それだけは褒めてやろう。」
士「ま、待て！…ぐっ…！」

まだ壁にぶち当たった衝撃のせいで、動けない。

そのままシャドームーンはユウスケを連れて消えた…。

夏海「…ユウスケ…。」

士「…くそっ！どついうことなんだ…」

戸惑っている士たちを陰から見つめる視線があることに、まだ二人は気付いていなかった…。

T o b e c o n t i n u e …

第三話 月影の真の姿・・・（後書き）

急展開？

いや、漫画版はもつと急展開なんです（↑）

もう読者無視、もいいくらいに（↑）

この小説はなるべく説明を少しずつ入れていくつもりですよ。

…そうしないと、本当に読者無視の小説に

なってしまうので・・・（汗）

それではまた第四話にお会いしましょう。

全てを破壊し、全てを繋げ！

第四話 兄妹亀裂（前書き）

兄妹亀裂。

タイトルから見たら凄い恐ろしい話なのか、と思うかもしれないですが、そんなことないです。小夜ちゃんってヤンデレっぽいところありますよね…

それでは第四話お楽しみください。

第四話 兄妹亀裂

月影に騙されていた。

そのことを知った土は、ただ呆然と立ち尽くしていた。

夏海はそんな様子の土を心配そうに見つめている。

夏海「…土くん…。」

月影に蹴飛ばされたときの痛みもまだ残っている。

そんな土に周りのことを気にしろ、と言っても無理だろう。
二人をじつと見つめる視線があることに、気付けなかった。

夏海「土くん…大丈夫ですか？」

土「…まあ…なんとかな。だが…なんでユウスケが連れ去られたんだ…??？」

夏海「…人質…でしょうか。…まさか！改造されちゃうんじゃない！」

土「…それはないはずだ。…多分…」

土「（多分究極の闇を生むためだ…。あの石を使って…）」

土はまた考え込んでしまった。

夏海はふと横を見ると、何かに見られているような…そんな感覚がした。

夏海「…土くん。」

土「…どうした？夏みかん。」

夏海「…気のせいかもしれないんですけど…。視線を感じるんです。」

士「…視線？」

士は辺りを見渡す。

そして初めて気付いた。

彼女に見られているということ。

士「…小夜。」

夏海「え？小夜ちゃん…？」

士が小夜の名前を呼ぶと、フラリと物陰から姿を現わす。

小夜「…ずっと見ていたのに。」

士「…そうなのか。」

小夜「小夜はずっとお兄ちゃんのことを見ていたのに！」

士「…?!」

小夜「…結局お兄ちゃんは自分が大事なんだよ。何かを守るとか…絶対にできない。…そんなお兄ちゃん…いない。」

小夜の周りには黒いオーラのようなものが見えてくる。

士は少しやばい…と思った。

なぜやばいと思ったかは分からないが、とにかくこのオーラは危ない、と。

小夜「…小夜はずっと待ってたのに。やっぱり小夜の元には戻ってこないんだね。」

士「…小夜…！」

小夜「…もういいよ。小夜は月影さんと楽しく過ごしていくから。これからも。」

士「ま、待て…！小夜…！」

士が止めようとしたが、小夜はその場から立ち去っていった。

士は動揺していた。

記憶は戻ったが、小夜がそんな気持ちでいることは知らなかったからだ。

戻ってきた記憶を必死にたどる。自分は彼女に何をしていたのだろうか。

彼女は不思議なオーロラを発現できる能力を持っていた。

そのオーロラは自分たちが住んでいる場所とは違う世界が映し出されていた。

しかし彼女はそのオーロラを通って世界を移動することはできなかった。

それができたのは・・・士だけであった。

そのオーロラの中に入って違う世界で遊んだことはあった。でもちゃんと小夜のもとに戻ってきていた。

士「（くそ・・・！）」

舌打ちをする士。

それを見ていた夏海は今まで疑問に思っていたことをぶつけることにした。

夏海「士くん・・・。士くんはこの世界にいたころ何をしていたんですか？」

士「・・・何をしていたか、だと？」

夏海「・・・は、はい。いや・・・私は何も知らないし・・・。知りたいんです。士くんのこと。」

士はできれば自分の過去を誰かに知られたくはなかった。

なぜなら。

ユウスケをとらえた組織の一番上にいたから。

夏海「話したくないならいいんです。でも……でもやっぱり気になるっというか……。」

士「結局は知りたい、ってことだろ。はっきり言えよ。」

夏海「ま、まあ……そうなんですけど……。」

士「話すぜ、俺の過去。」

夏海「え……？いいんですか？」

士「……ああ。後悔してもしらねえからな。」

士がそういうと夏海は笑顔になった。

そして士は自分の過去のことを話し出した……。

T o b e c o n t i n u e …

第四話 兄妹亀裂（後書き）

最近携帯で下書きしてそれをPCにメール送信して、それをコピーしてUPする、という形をとってます！なので最近は結構スピード早めです（笑

さて、今回の第四話でした。いかがでしたか？
やっぱりセリフが多いですね。

もう少しセリフを減らさないと・・・だめですね。
それでは第五話でお会いしましょう！

世界を破壊し、世界を繋げ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4404p/>

仮面ライダーディケイド オールライダーVS大ショッカー

2010年12月18日17時32分発行